



# ヨシイちゃんのと ひとりごと



## 運・鈍・根

宜しくお頼み申し上げます。第九話 上げます。

私16歳(高二)の時、父が「ラビットスクーター」を買って、私も軽自免許を得ようとして「母」と争い実の母でないと知った。(当時は免許は戸籍抄本要) 祖父母・親戚・近所からも聞いて無くショックを受けた。が、ヤッパリと納得は出来た。それでこの先の自分の立つ位置で悩み、その所為だと思いが頭に大きなハゲ(円形脱毛症)ができた。同級生中の残酷な奴は「丹栗」とあだ名を付け、黒板に「丹栗」の絵を書いてからかった。小さくで気の弱い子だった私は無駄な抵抗はしなかったが親友が抗議し治まった。彼がいなかったら退学したかも。(その友は昨年亡くなった。)



立命館高校北大路校舎

頭法泉院にお住まい。電車賃が無く吉田から歩いて大文字山越えて行った。

話をお聞きくださって「君の父と話合ってみよう」と言ってくださった。宜しくお願ひ寺を出ようとする「酒谷」山越えて歩いて」と応えた。「それは大変、電車に乗って帰れ」とお金を下さった。ホッとして涙が出そうなほど嬉しかった。

数日後、職員室に呼ばれ、父を説得して「進学」を承諾させたと報告を得た。父の進学反対は、私が読んだいた雑誌「改造や世界」本棚の「社会科学書籍」から進学で更に私が「左翼」になるのを恐れただのらう。進学がきまり直後から猛勉強はしたが志望校には入れず「立命館大学経済学部」に入學した。高三の時柳田先生の担任でなかったら相談する人もなく私は今は全



三井寺境内: 毘沙門堂前歌碑 園城寺学問所々長 柳田暹嘆 限りなく刻へし如く たまゆらのことのごとしも いま定を出づ 暹嘆

その柳田先生は卒業前、担任の三年三組で「裸木会」と命名し毎年成人の日に集まる「クラス会」をつくらうと提案された。先生にとつて始めての卒業生クラス担任だったので想い入れも強かったのだらう。その「裸木会」の第一回目は、卒業前の成人式の日。四条大橋詰めの「すき焼き屋」で悪い奴は酒を持ち込み飲む。直ぐ下に交番がある。先生は「飲んでも良いが顔はだすな」

## 青春切符

石動敬子



だ。今ならエライコッチャ!。その「裸木会」は先生がお亡くなりになった今も、なんと百二十回を越えて集り開く。「坊さん(先生のあだ名)」を慕って続いているのだ。最後には、先生の徳を偲びながら、既に先生のお歳を越えてしまった老人たちが、校歌♪赤き血潮、胸に満ちて♪をスクラムを組んで歌う。その瞬間は青年の戻った気分。繋がった運と健康を喜び合う。

(青春切符を買い求めるのに、さてよ、金券ショップというものがあそこそこで買えば二百円安いぞ。)と知り、何年かそうしてきた。が、最近更に三十円安い店を見つけた。その為、少し遠くまで出向く。似たようなことは日常茶飯事だ。ちよつとでも安いとなると、目の色変えるのは、私たち女性ばかりなのか。娘から或る朝「卵安いから、並んで!」と携帯電話で、命ぜられた。あほらし、と思ったがついでの用もあり行く気になった。一時間も前だというのに、並びだした。昭和一ケタという類だった。にこやかですぐ親しくなり、同世代のよしみに

更に、盛り上がるのだった。「戦争中の配給思い出しますねえ」などと弾む話につられて笑ううちに、時間が来た。開店と同時にざわめきが起こり、速やかに、店の奥の卵売り場、先着二百人様の108円の1パックを両手に受けると何やら、ご褒美を頂いたように嬉しく、他にもそのようなお得なものがありはしないか、と店内を闊歩した。

配給の話は、毎日のおかずのように聞かされたので、団塊の世代ながら、戦後のどきどき、物質不足で食べるのに必死だったこと、シベリア、満州から引き揚げてきた姉様たちの大家族が問借りしていたことなど追体験させられる「靖国の家」だった。皆が貧しかった頃、というのは、思いついたならば感慨深く、懐かしいのだろう。しかし、朝の連ドラ「ごちそうさん」を見ていくとわかるが、みんなが貧しかったわけではなく、どきどきに乘じて特権を振りかざすひとたちもいた。卵1パックを抱えて帰りながら、この4月からの事を思い、暗然とする。「まとめ買い」の余裕も年金暮らしから遠い。5%でもこんなふうには右往左往するのに、四月からは、毎日でも並ぶか。卵の時のように。わいわいと親しく、赤組、白組、ひよこ組なら可愛いらしい。クラス替えもある。巷で言われる究極1パーセントの勝ち組と、負け組には逆転勝ちも入れ替えもない。みんなでなら乗り越えられる悲哀も、この二つの組を隔てる壁は益々高くなるようだ。青春切符は、時折、逆転の妙案がうかんだものだった。時刻表のトリック、ミステリー風の、そんなプラン探しも楽しかった。でも昨今は、ダイア自体一部のすきもなく節約派向きには作られてない。春休みの孫を九州まで連れていく旅も、だから、あれこれ、考える楽しみから遠く、「のぞみ号」に乗らないとすれば、あほらしいほどの時間のロスが待っているのだ。



